

無教会主義

矢内原 忠雄

今日の午後の内村先生の記念講演会で私は「日本の思想史上における内村鑑三の地位」という題を掲げましたが、講師が四人でありまして、ひとりの持ち時間が四十分でありますために、題が少し大き過ぎて、時間を考えると十分お話ができないだろうと思います。それで今日の午前の集会では聖書のお話を一回休み、無教会主義についての私の考えを、皆さんに聞いておいていただこうと思うのです。

内村鑑三は日本の生んだ大思想家の一人であつて、無教会主義の陣営の独占すべきものではなく、教会の人も内村鑑三を尊敬し、また信者でない人も内村鑑三を勉強し、またその意味を認める。そういう時代になつてきております。先日読売新聞社の主催で、内村鑑三生誕百年に関して座談会がありました。大塚久雄教授が司会をし渡辺善太氏と私とが主として話をしたのですが、渡辺さんのお話でも、内村鑑三は無教会だけのものではない、教会も内村鑑三を尊敬し、それから学ぶところがあるということとを主眼とされました。内村鑑三イコール無教会主義

ではない。内村鑑三は無教会主義よりも大きいものである。こういうことであります。

私の感想も、それでいいと思うのです。内村鑑三はイコール無教会主義である。無教会主義イコール内村鑑三であるというように思っている人もなかにはあるようですが、私はむしろ内村鑑三は無教会主義よりも大きいと言つていいように思うのです。これは無教会主義に対する定義の下し方、考え方にもよるわけでありませう。渡辺善太氏を教会側の代表者と認めていいならば、内村鑑三の中における無教会主義をできるだけ小さい、ウエイトの低いものに考え、また無関係なものに考えれば、内村鑑三が教会・無教会を問わず、共通の財産として教会側においても内村鑑三を先生と仰ぐ、それから学ぶということが、それだけ差し障りのないことになります。無教会主義を小さく解釈しようとするのです。

それに対しては、私は賛成しないのです。そういうように小さく考える内村鑑三の無教会主義は、このはずみで起つてきたものである、と理解するのです。教会側からいじめられたり、あるいは教会側の友だち、同年輩の人と人間的にウマが合わないというか、そりが合わないので、肌合いが違った。そ

ここでは人間的に対立関係であった。そういうことからやむを得ず、無教会主義を唱えた。無教会主義は彼の本心ではない。つまり別の言葉で言えば、教会側の人との間の人間的な対立関係や感情的食い違いを経なければ、内村鑑三は無教会主義を唱えることはなかっただろう。こういう見方です。

これに対しては私は、そうでない。私は無教会主義は本質的なものであつて、偶然的なものではないと思います。なるほど、彼が無教会主義を唱え出したそのきっかけは、宣教師や教会側から迫害されたということかもしれないが、その底には深いものがあつて、つまり信仰の本質から出たものがあり、偶然的なものではない、と私は考えます。

もう一つ、内村鑑三における無教会主義を小さく見ようという教会側の見方の中には、次のような根拠があります。内村鑑三自身が青年時代に洗礼を受けたし、自分も希望者に対して洗礼を授けたことがある。それから札幌独立教会という教会を自分たちが建設して、そのの会員となつたこと。さらに、そのほかの教会に彼はしばしば応援に行つて教会で説教したことがある。これらのことを挙げまして、内村鑑三は教会を否定したのではないと言うので

す。内村鑑三の無教会主義は、教会否定でもなく教会破壊でもなく、教会を是認する立場に立つているものだが、その弟子たちの無教会主義は、それから離れて邪道に陥っている。「邪道」とはいいませんが、エピゴーネンたち、亜流者たちの無教会主義は、内村鑑三を正當に理解するものでない。内村鑑三はむしろ教会の畠の人だ、と言つて自分の畠に取りこもうとしている。どうも内村鑑三の取り合いをしているように見えるのです。

いま、教文館で出ています『内村鑑三聖書注解全集』の中に挟まつている、月報のようなものに渡辺善太さんが書いている。渡辺氏と私とはよほど因縁があると見えます。この中に、こういうことが書いてある。内村先生の無教会主義は、根のあるものではないが、弟子たちの言っている無教会主義はそれから非常に離れて動きのとれない固いものになつてゐる、内村先生の無教会主義は詩である、詩的である、詩人的であるが、塚本虎二君の無教会主義は神学的であると、塚本氏が自分で書いているのだから、間違ひはない。こう渡辺さんが言っているのです。

内村鑑三の無教会主義は詩的である、詩のように歌っているものであつて、思想的なものではない。あるいは信仰的な、あるいは神学的な、聖書的なものでない。弟子たちの無教会主義は神学的で講義的で固いものになつてしまつている。こういう批評です。

内村先生には詩人的な要素がたくさんありましたし、無教会についてもいろいろの言い方をされておりますから、片言隻句を捕えれば、内村先生の無教会論は、矛盾しているところもあり、不統一の点もあります。弟子たちの無教会論の方が、矛盾不統一をよく突き詰めて考え抜いているというところはあるかもしれません。内村先生はメソジスト教会のハリスという宣教師から洗礼を受けております。御自分も何人かの人に洗礼を授けたこともあります。札幌独立教会という教会を創立されたし、またほかの教会へ行つて講演されたこともあります、明らかなことは、先生は自分が洗礼を受けたことを非常に大事なことと考えて、私は洗礼を受けたということを言われなかつたことでもあります。洗礼を受けたことは事実ですが、自分は洗礼を受けた者であるとか、洗礼を受けたからどうだ、ということをしる先生

は教えの中で言われなかつた。無視された。ある人々には洗礼を授けましたけれども、それを一般的なものとされたわけでもなく、また非常に大事件であると言われたわけではない。独立教会を建てられただけども、これは晩年になつて、年長の友人関係で援助されたのでありますが、札幌独立教会を退会することを友人の宮部博士に書き送つて、退会しておられる。先生が、いま申したような事柄で、無教会主義を、ただ、ことの勢いで、詩人のようにパツと言つたものであるというように解釈することは、非常に間違つていふところがあります。教会を援助することは、私自身でもたびたび教会に行つてお助けしたことがあります。無教会主義は教会を否定したり、教会を破壊したり、そういうものでないということは、内村先生の場合でも、われわれの場合でも明らかにわかると思ふのです。

もう一つ、渡辺善太氏が引用されている所ですが、内村先生は『聖書之研究』という雑誌を創刊されてから二、三年たつて、『無教会』という雑誌を作つておられます。たとえてみれば、いま私が『嘉信』を出すかたわら、別に『山鳩』という、非売品ですが、『嘉信』読者の同人雑誌を出しているよう

なものであります。『無教会』は『聖書之研究』の読者の同人雑誌なのです。内村先生もそれに寄稿されましたが、読者たちの文章が載っておりません。信者のエクレシヤであるという趣旨で創刊されたのですが、この『無教会』という雑誌の創刊の時に、内村先生が「無教会」という言葉を説明されております。これは教会を無視するとか、教会を無にするというふうに読むべきでなくて、無い教会、教会の無いことと読むべきである。教会の無い者は、親の無い子供のようにかわいそうな者ではないか。それで、この『無教会』という雑誌を出して、お互いに愛の交わりをするエクレシヤだという趣旨の創刊の辞を書いておられます。

これを捕えて、内村鑑三の無教会主義は教会否定ではなくて、教会の無い者の集まりに過ぎないと言つて、渡辺さんなどは引用するのです。

確かに教会の無い者の集まり、教会の無い者のエクレシヤということで、説明されているのですが、その次が問題となるのであつて、教会の無いということは、信仰的にみて、未熟な初歩的な段階であるか否かということであります。カトリックの人は、内村鑑三の無教会主義はそんなに有害なものではな

く、無教会は教会の無い者の集まりというだけの意味であると言います。

また内村先生の書いた文章の中に、プロテスタント教会の支離滅裂なことを攻撃されて、もし自分が無教会主義でなければ、カトリック教徒になると書いたところがあるのです。それもカトリックが捕えて、内村鑑三はものわかりのいいことを言っている。しかるに弟子たちはカトリックを目の仇にしている。弟子たちは動脈硬化に陥っている、というわけです。カトリックの見る内村鑑三論によれば、あれは害の少ない初歩の信仰を述べているので、内村鑑三はもつと勉強し、もつと信仰が進めばカトリックになるということになります。ですからカトリック教会はそれに対して悪魔呼ばわりをしてはならない。カトリックはよく伝道に來ますと、カトリックに属しない者を悪魔と呼ぶログセがあるらしいですね。カトリックの坊さんが日本では（無教会主義に対して）悪魔呼ばわりをやつてはいけなと言つて誠めている。内村鑑三の無教会主義は、悪魔呼ばわりをすべきでなくて、あれは未熟な初歩のものだから、これを寛容に包んでいなければならない。

プロテスタント、たとえば渡辺善太氏がこれについてどう思っているか。彼は、そこまで言いませんが教会の無い人の集まりは、やはりもつと聖書を勉強し、もつと信仰が進めば、教会になるだろうという期待をもっているのではないか。これは私の言い過ぎかもしれませんが、そういうことになるのです。

ところが、内村先生の言った「教会の無い者の集まり」「教会の無い者のエクレシヤ」は、自分あるいは自分の仲間は信仰の未熟な初歩的な、求道的な段階であるという意味ではないのです。無教会は、信仰の極致である、一番信仰の深い所がそれであるというのが、内村先生の無教会主義の主張です。

教会の無い者の集まりということは、カトリックやプロテスタントの教会のみるように、たいして有害なものではなく、だんだんカトリックや教会がわかってくるというものではなくて、それ自体の中に全く革命的な教えがある。つまり、教会の無い者、教会をつくらない者、教会に属さない者でも、キリストを信ずることによって、その信仰を義と認められる、すなわち救われる。教会という門を潜らなく

ても天国に行けるのだという主張は、革命的な教えです。それを内村先生がなされた。

その次に問題となるのは、教会はそれでは間違っているか、教会に行っている人は救われないか。こういうことになりますと、教会に属しているから天国に行けないとは、内村先生も言われないし、私どもも言いません。教会で洗礼を受けたから、教会で集まっているから、だから信者でないとは思いません。ただ、ルターの宗教改革の行なわれた前後、そのあとの方が盛んになったのですが、イ（アイ）コノクラストという運動が起りました、これは偶像破壊主義者とも言いますか、教会を襲撃し、教会に立っているキリストの像を打ち倒したり、キリストの絵を破つたり傷をつけたり、十字架やろうそくを打ち倒したり、荒して回る運動がありました。内村先生の無教会主義は、もちろんそういう意味の教会破壊主義、教会否定主義ではないのですが、教会が無くても救われるということが徹底すれば、教会は非常に変わってくるでしょう。少なくとも、教会に属さなければ救われない、クリスチャンと認めないということは言わなくなる。あるいは言えなくなる。

そうすると、これは従来の伝統的な教会主義に対しては、革命的な影響で、教会自身が内側から変わってくることになる。内村先生およびその無教会主義は、教会を破壊し教会を否定する主張をしたわけではないが、教会に属さなくてもクリスチャンであり得るということ承認すれば、従来のキリスト教の教会主義は非常な変化を蒙らざるを得ない。

今度は見方を変えて、いわゆる無教会陣営の中における無教会主義観をとりあげてみましょう。内村鑑三の信仰あるいは内村鑑三の活動は、すべてが無教会主義である。内村鑑三イコール無教会主義という見方が、無教会主義の中にあるようです。それに対しては、私は若干違った感じをもっている。たとえば社会問題とか政治問題について関心をもつことが、無教会主義の特色であるかという、そういう問題ですね。内村鑑三は社会問題、政治問題について関心をもっておられました。発言もされた。ある程度の行動もされました。旧約の預言者のような風格がありました。けれども社会的・政治的問題について関心をもつことが、無教会主義であるかということ、私はそれほど密接な関係があるようには思いません。キリスト教の信仰全体として考えるのも一つ

の考え方ですが、無教会主義に即して言えば、無教会主義の中の、ある人々は社会問題、政治問題についてそれほど強い関心をもたないとしても、不思議なことはないと思います。そういうことに関心をもたなければ、無教会主義ではないとは言えない。内村鑑三はおもちになつたが、無教会主義あるいは内村鑑三の無教会主義は社会的・政治的問題に対する関心とイコールではない。そういうことに対する関心が少なくても、無教会主義であり得ると思いません。

それからもう一つ、それとちようど反対のようなことですが、十字架による罪のあがないを信ずることが無教会主義である、という解釈も非常に多いのです。十字架による罪のあがないを信じなければ、無教会主義者ではない。無教会主義者は必ずそれを信ずる。それを重要に信ずる。

この問題についても、私は両者の間に関係がないとは思いません。しかし直接には関係がない、あるいは関係は薄いと思います。内村鑑三は、十字架による罪のあがないを嚴重に堅く信じました。十字架による罪のあがないを抜きにしては、内村鑑三の信仰はありませんが、しかし内村鑑三の無教会主義と

内村鑑三の十字架教、十字架信仰との間には、必ずしも必然的な関係はない。ですから、いわゆる無教会主義の陣営の中で、十字架の教えがよくわかりませんと言う人があつても、その人は無教会主義者であり得ると思います。信仰は、深いものであり、また年とともに示されてくるものでありますから、ある時に十字架による罪のあがないが、よくわからなくとも、後に教えられるということがあります。だから、十字架の教えがわからないことをもつて、あの人は信者であるかないか、無教会主義者であるかないかなどということにはならないと思いません。

内村鑑三の再臨信仰は、先生の晩年になって火のように燃え出したものであります。十字架による罪のあがないと復活と再臨は、聖書の重大な信仰の三つの柱ですが、内村鑑三は初めから三つともすべてを同じような熱心さで唱えたわけではない。時代的な移りがあるように思う。一つのドグマ、教義、たとえば罪のあがないという教義をもつことが無教会主義であるというには、少し無理なところがあるのではないだろうか。だから内村鑑三の信仰は、無教会主義であると言えば、それは言い足りない。内村

鑑三は無教会主義よりも大きいと思えますから。教会に属さなくても救われるということと、それからきわめてオーソドックスな、教会の人もみな信じているところの罪のあがない、肉体の復活、キリストの再臨が、内村鑑三の信仰の中心をなしたものです。内村先生の信仰はどうだったかと言えば、罪のあがないの十字架の教えが根本であつたと言わねばなりません。無教会主義の中心はどこにあるかと言えば、それは教会に属さなくても救われるということであつて、十字架の教えは教会の人も信じているのですから、教会・無教会を越えての問題だと思われる。

ただ関連なきにしもあらずと申しましたのは、ロマ書の三章の二八節にある、「律法の行為によらず信仰によりて義とされる」ということの、「律法（おきて）の行為（おこない）」であります。「律法」には、道徳的な要素の多いものと、祭司的な要素の多いものがあります。旧約の律法中には、道徳的行為とともに、祭りの制度の要求する潔めとか、いけにえとか、日を守るとかいろいろのものがあつて、そういう律法の要求、祭的要求を完全に履行しなくてもよろしい。履行しなくても救われ

る、信仰によつて救われる。そういうことが無教会運動に含まれている。洗礼とか聖餐のような sacrament、礼典と言われるもの、そのほか教会制度の中に養われてきたいろいろの伝統、トラディションがあります。それらを満たさなくても、信仰さえあれば救われるというのが無教会主義なのです。その点において、キリストを宥めの供えものとし、罪のあがないによつて救われることが意味をもつてくる。もしも無教会主義の特色の一つとして、十字架による罪のあがないを入れるならば、そういう関連において意味をもつて来ますが、ただ箇条書きに並べて、十字架の福音を信ずることがすなわち無教会主義だ、と言うのは少し論理の飛躍があるように思われる。

無教会内における無教会主義観の中にはパウロが 로마書で誠めているように、律法を無視するアノミストといえますか、律法無視、道徳無視、伝統無視、それに必然的に伴なってくる世俗主義が入ってきます。これこそ無教会であると思つていふことがある。無教会は何ものにも捕われない。だから酒を飲んで俗歌を歌つてもいいではないか。相場に手を出して金もうけをしたっていいではないか、

等々。教会の伝統にも縛られないし、律法にも縛られないし、信仰さえあれば義とされるということに甘えて、律法無視、伝統無視、世俗主義、肉体主義に入つて行く。これが「無教会」という看板をかけた、われらこそ無教会の集会であると、無教会を標榜している。

こうなると、無教会の大変な踏みはずしであると言わなければならぬでしょう。無教会の中にいろいろ問題があります。無教会は危機に臨んでいる。内部的危機があり、外部からの危機がある。内部的危機は分派主義、セクシヨナリズム、それから教義主義。無教会という教義を立てて人を裁く教義主義、それから、われこそ無教会の正統であると名のるような分派主義。人を非難する、無教会内の人々を批判する分派主義。それから異言とか神癒とか、それに伴なう肉欲主義の世俗主義。こういう危険が無教会の中に芽生えております。

外からくる危機は、無教会を一つの勢力として認めなければならぬという認識であります。内村鑑三をわが畠に引き入れようという動きがある。またこれとともに、無教会は、日本のキリスト教会において無視することができない勢力である。もはや無

教会の者は救われぬとか、本当の信者でないとか、言えない。無教会の人の方がかえってよく聖書を勉強し、信仰的に生活している。伝道の意欲もかえってあるというようなことで、むしろ無教会を認めざるを得なくなっている。この、一つの勢力として認めなければならぬという認識を、私どもの外の人がかもつてきたことが、無教会に対しても非常に大きな危機であります。無教会勢力ではなく一つのスピリット、精神信仰であるのです。無教会の精神、信仰を外部の人が認めてくれるならば、当然喜ぶべきことでありますが、そのスピリット、精神を認めないで勢力として認める、尊重するということであるならば、無教会にとつての大きな危機がそこにある。

この誘惑はもうわれわれの周辺に満ち満ちております。ごく最近のことですが、キリスト教新聞社と『キリスト教年鑑』の編集部が連名で、私の所へ印刷した手紙を送つて寄こしました。内村鑑三生誕百年を記念して無教会の実情を調査する、どうぞ協力して下さいという趣旨で、印刷したアンケートが入つていた。これには協力のしようがない。答えようがない。第一に名称というが出ています。無教

会の集会の名称。私どものやつている集会には名称がない。今井館の集まりと言つているのであつて、矢内原聖書研究会というのではないし、今井館聖書研究会もない。ただ普通に集まりと言つている。場所を指定するために今井館の集まりというだけで名称がない。会員数も書きようがない。会員がないから。創立の年月日も書きようがない。機関紙も書きようがない。『嘉信』は機関紙ではないから。どの項目も書きようがない。所在地も書きようがない。私どもは集まつてもに聖書を学んでいますけれど、団体でもない。すなわち勢力でもない。調査対象にならないのです。財産がない。献金もない。捕えようのないものを形で捕えようとする。これは勢力としてみているからなのです。うっかりそういうことに乗りまして、私どもが自分自身を形で捕えることができるように思つて勢力化するときに、無教会はもぬけの殻になつてしまふ。われわれ無教会は教会になる。無教会という教派になつてしまふ。高貴な精神は蒸発してしまふ。いまはその時期にきているから、私どもはよほど注意して、無教会の信仰を純粹に維持する必要があると思ひます。

(一九六一年三月二六日、東京・今井館聖書集會。)